

伝統を街づくりに生かす

吉川 真嗣味匠 喜っ川(みしょうきっかわ)の専務。 新潟県村上市大町1-20 0254-53-2213

伝統文化に新たな価値を付加して見事に花開かせた“村上ルネッサンス”の仕掛け人

戦後にできたアーケードで覆われた大町など村上中心部の商店街は、郊外にできた大型店に客足を奪われ、すっかり活気を失っていました。持ち上がった旧市街地の道路拡張計画に対し、町屋・寺町・武家町・城址が揃って残る全国でも珍しい城下町村上の魅力を失ってはならないと、単身反旗をひるがえしたのが吉川氏でした。



吉川 真嗣さんは新潟県村上の「町屋のあきんど会」の会長をしている。村上には売り場と生活空間が通路で一体となった奥行きのある町屋造りの店が今なお残っている。表を素通りしただけでは判らない建物自体の魅力に着眼した。村上らしさは建物、町屋の古い生活空間にあると思う。外観ではない。生活空間に光をあてる。

店の暖簾をくぐると店の売り場、つづいて茶の間、土間、作業場、通路とつづき何百本ものサケがぶら下がっている。表から裏まで約70m。昔、税金が間口で決まったため細長い町屋を形成している。

村上には城下町で城、武家屋敷、町人町(町屋 約370棟)、寺町がバランスよく残っている。その価値ある町を残したいと思っている。古いものを生かして町の発展につなげ活性化させたい。

町屋の外観を再生する活動を始めて「あきんど会」を発足させた。22軒の古い町屋が点在するマップで作成した所、テレビ・雑誌などで紹介され全国から村上の町屋に人が訪れた。いろいろある茶の間、旅人の褒め言葉で地元の人々が村上の町屋の価値に気がついた。会津若松の須藤さんが私の師匠です。

町屋の外観再生に取り組んで8年、合計23軒が再生された。今後、村上らしさに磨きをかけたい。

真嗣氏は現社長である父君と母上を説得し、江戸情緒溢れる瓦葺屋根と格子窓・障子戸を備えた店構えに改装します。それを皮切りに、市民基金による店舗の歴史的外観の再生と町に賑わいを取り戻すための新たな試みに着手したのです。出資者を募って黒塀を1枚1,000円で購入してもらい延伸する「黒塀プロジェクト」を始めた。ブロック塀を黒塀に変える。大勢の人が賛同してくれた。現在390m出来ている。ブロック塀の上に手作りで黒塀に代えていった。子供達もペンキ塗りを手伝ってくれた。

夢を持てば必ず実現する。

黒塀通りを5,000本の蠟燭の灯火が照らす「宵の竹灯籠まつり」、「十輪寺えんま堂の骨董市」など、城下町村上に新たな魅力を加える事業を次々と仕掛けてゆく。

現在、緑一口1000円運動を展開中。黒塀にあう紅葉を植えている。

そこで伝承されてきた雑飾りや屏風などを含め、“自らの足元にあるもの”を巧みに組み合わせる観光資源として公開し、町の活気を取り戻そうとした。後に「町屋の人形さま巡り」や「屏風まつり」といった歴史ある城下町ならではの風情ある催しで、多くの人を呼び寄せることに成功した。この地域起こしの取り組みは、吉川氏が商店街を一軒ずつ説得して始まったものでした。

3月には「町屋人形様巡り」、9月には「町屋屏風まつり」には、全国から多くの人々が村上に来てくれる。古いものに光をあてて価値を見出している。町屋の年寄りが観光客に対し、生き活きと目を輝かせて説明し触れ合っている。

